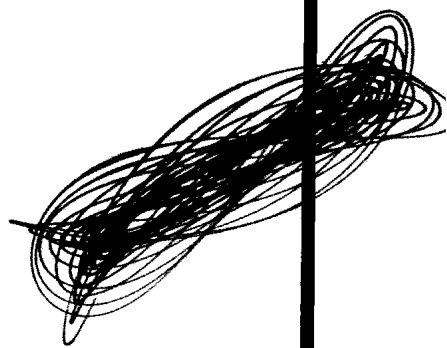


夜は新しく

菊村 到

は新しく

菊村 到



夜は新しく

©

著者 菊村 到

昭和36年9月13日 印刷

昭和36年9月18日 初版発行

発行者 陶山 巖

印刷 慶昌堂印刷

発行所 集英社

東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三

電話 (301) 3201

振替 東京15653

定価 380円

(石毛製本)

秘密	5
演技	27
自分というもの	35
そんな夜	51
不良少年	79
伊豆の旅	87
海の不安	100
みちのく	111
告白	127
仮面と素顔	161
波紋	188
悪い予感	212
出会い	239
あるたくらみ	256
ゆがんだ関係	270
若い唇	283
新しい夜のために	290

■
目
次
■

裝 構
幀 成
大 岩
野 本
典 常
光 雄

夜
は
新
し
く

■秘密

妻は、退屈している。それは、ぜいたくであろうか。

退屈するのは、妻の身勝手といわれるだろうか。毛利由美子は、二十八歳のわかい肉体が、妻の座にしぼりつけられ、日常生活の重い環のなかに閉じ込められていることに、不満を抱いている。この重い環のなからぬけだしてみたい、というおもいがこのごろになって、熱っぽく彼女をとらえはじめたのだ。息がつまりそうなのだ。家庭というものから、はみだしてみたい。家庭から、はみだした場所で、おもいきり、背をのびし、手足をひろげて、大きくふかく、呼吸してみたい、とおもう。そうやって、自分が生きているということのあかしを、感じとりたのである。

しかし、彼女は、けっして家庭の破壊を、のぞんでいるわけではない。夫を愛していない、というわけではない。夫との生活に、積極的な不満があるのではない。

げんざいの彼女の生活を、ひとことと言いあらわすな

ら、平和ということばを、持ってくればいい。全く彼女の生活は、平和そのものであった。経済的にも、じゅうぶなめぐまれている。夫の毛利直保に、これといった欠点があるわけではない。夫婦仲も、べつにわるくはない。ただ、年齢の点では、ふたりのあいだにひらきがある。毛利直保は四十一歳である。夫と妻の人生には、十三年のへだたりがある。

けれども由美子は、この歳月のへだたりを、かくべつふつごうだとおもったこともない。毛利直保は、色が白いし、皮膚にも張りつつやがあつて、三十五、六にしかみえない。髪の毛もくろぐろと、豊富である。

毛利直保の身辺には、いつも、あまい匂いが立ちこめている。匂いのうずの中心に、毛利直保は立っている。濃密な夫の匂いに、由美子は、ふっと、むせぶことがある。

その朝、毛利直保が家を出るとき、由美子は、かれの首すじにかるく接吻した。床屋へ行つたばかりの夫のえりあしは、あとおおとさえていて、そこからあまい匂いが、ゆらめき、立ちのぼった。それは、由美子にかいままいをもたらしした。

直保は、くすぐったそうに首をちぢめ、

「もしかしたら、神戸にも、寄ってくるかもしれない。多少、帰るのがおくれても、心配しないでくれたまえ」と言った。

そのことばに、由美子は、ふっとわるい予感をおぼえた。暗い挫折の予感、とでもいったふうなものが、ほんの一瞬、由美子をとらえた。由美子は、夫の目を見た。直保は、目をほそめた。おびえたような表情を、そこに見たように、由美子はおもった。

直保は、午後二時三十分発の第二こだまで、大阪へ向うことになっていた。夫を送りだしたあと、由美子は、なんとなくおちつかない気持ちになった。

——夫が出勤して、家のなかで、からっぽになったとき、妻の生活がはじまるようであった。

夫がいなくなったあと、そこには、妻にとって自由な時間があった。その自由な時間のなかで、妻は退屈する。毛利直保と由美子のあいだに、子供はない。結婚したのは、八年前である。由美子が、二十で、直保が三十三歳のときである。

毛利直保は、匂いのなかで、くらしている。匂いを追うのが、かれの仕事である。遍在する匂いのなかで、たえまなく、未知の匂いを追いもとめていくこと、そこに

直保の生活がある。

つまり、かれは、香料の研究家なのである。エリーゼ香料本舗の技術部長というのが、かれのポストである。

どんなに小さくてもいいから、銀座あたりに、一軒、香水専門の店を持ちたい、というのが、かれの念願である。それが、かれの夢なのだ。

由美子は、そんな夫の夢を退屈だ、とおもう。おもうのは、勝手である。

夢があるだけでも、しあわせだと言わなければならぬ。私にはどんな夢がある、というのだらうと、由美子はおもう。

私には、夢がない——、ほんとうに、そうなのだらうか、夢が、ないなら、どこから、さがしださなければならぬ、夢をさがすこと——。

夫のいなくなったあと、二階の夫婦の寝室で、由美子は、そんなことを考える。そして、いとこの女流画家、来宮典子の絵の展覧会の案内状が来ていたことを、おもいます。

来宮典子は、由美子よりひとつ下の二十七歳だが、まだ独身である。由美子には、来宮典子の人生はわからない。わかっているのは、来宮典子には、由美子にはない

なにかがある、ということだ。そのなにかが、彼女に、絵をかかせるのであろう。

ふと、その絵を見てみたい、と由美子はおもった。積極的にそんな気持ちになったのは、めずらしいことだった。

由美子は、ブザーを鳴らして、ばあやのイネを呼んだ。イネは、浴室で、電気洗濯機を使っているところであった。モーターの音で由美子の鳴らすブザーが聞こえないらしい。由美子は、もういちど、ブザーを鳴らした。

イネが、前掛けで、手をふきながら寝室にあらわれた。

「ちょっと出かけますから、靴を出しておいてちょうだい。トカゲの皮の靴ね。晩ごはんは、いらないわ。イネさん、適当にすませてくださいな」

由美子は、腕時計に目をあてた。午後三時であった。来宮典子のグループ展は、京橋のA画廊でひらかれていた。

由美子は、そういう場所に、足をふみいれることに、かるい気おくれをおぼえた。ガラス戸をおしてなかへはいったとき、あぶらの匂いのようなものが、由美子を、つつみこんできた。

「あら、いらっしやい」

ふいに、そんな声がとんで来た。由美子は、おもわず声のほうに顔をむけた。

来宮典子が、にこにこしながら立っていた。

「由美ちゃんが来てくれるなんて、めずらしいな」

来宮典子は、握手をもとめてきた。絵を見に来ているひとたちが、ふたりのほうに、視線をむけてきた。

由美子は、てれて、首をすくめるようにして笑った。

「毛利がね、大阪へ出張したもんだから、出て来たのよ。退屈で死にそう——」

由美子は、大げさな言い方をした。

「うらやましいことを言うわね。こっちは、食うや食わずで、死にそうよ」

由美子は、ひととおり、壁にかかげられている絵を見てまわった。来宮典子の作品は、四点、出品されていた。四点とも、抽象画で、由美子には、よくわからなかった。

しかし、わからないなりに、由美子は、その絵を見ているうちに、興奮をおぼえてきた。自分の意志と力で、生きようとしている人間の強烈なエネルギーのようなものが画面ににじみでている、とおもった。

「典子さん、よかったら、夕ごはん、つきあわない？
おごるわ」

と、由美子は言った。

「ありがとう、でも、きょう、ちょっと、ぐあいがわるいな。このつぎの機会まで、権利を保留させといってもらわ」

典子は、ざんねんそうに言った。

「もうだめよ。せっかく、ひとが、その気になっているのに——」

由美子は、にらむように典子を見た。

「じゃあ、お茶だけでも、ごちそうしてよ、いいでしょう？」

と、典子は言い、さきに立って、画廊を出た。

画廊のすじむかいに、喫茶店があり、典子は、そこへはいって行った。腰をおろすと、典子は、たばこをくわえた。それから、由美子にもすすめた。

由美子は、たばこを吸う習慣をもたなかったが、ふと、吸ってみようかな、という誘惑をおぼえた。そして、一本、箱からぬきとると、口もとに持って行った。典子は、あたりまえのような顔をして、マッチの火を近づけてきた。

由美子は、けむりを吸い込んだ拍子にはげしくせきこんだ。そんな由美子を、典子があきれたように見た。

典子には、たばこのけむりにむせる、ということが、ふしぎにおもわれてならないようであった。

「やっぱり、だめだわ」

由美子は、胸をおさえて、くるしそうに言った。

「なにが？」

「たばこよ」

「たばこ？ ああ、そうか、あんた、たばこ、のまなかつたんだっけ——」

「あなたにすすめられて、ちょっと吸ってみたくなったのよ。毛利は、自分が、たばこを吸わないでしょう？ たばこの匂いを、きらうの」

「ご亭主のために、たばこを吸わないの？ 美談だわ」

典子は、ちょっと、こばかにしたような笑いをうかべた。由美子は、ばかにされても、しやうがないような気がした。

由美子が、たばこを吸わないのはべつに毛利のためではない。それは、おそらく、たんに習慣の問題でしかないだろう。いままで、たばこを吸ってみたい、ともおもわなかった。自分にとって、たばこは、全く無縁のもの

であるような気がしていた。だが、ほんとうにそうなのだろうか。たばこは、私にとって、全く無意味な、不要な存在なのであろうか。

なぜ、私がたばこを吸ってはいけないのか。妻が、それをもとめればあい、夫に、それをこばむ理由があるだろうか。

そんなふうに考えてみると、たばこを吸うという、全くとるにたらぬような、ささいな行為のなにも、なにか人生の意味が、かくされているような気が、由美子にはしてくるのであった。

そして、いま、自分の人生が、べつの色あいによって、染めかえられようとしているのを感じることができた。

「そう、そう」

と、典子が、おもいだしたように言った。

「おたくのご亭主、バアなんかへは、よく行くんでしょ。私のともだちがね、こんど、銀座でバアをやることになったの。もし、よかったら、ひいきにやっていただきたいの」

「なんとバア？」

「電通の裏どおりにある、トレントという店よ」

「私、行ってみようかしら」

由美子は、ふと、そう言った。典子が、おどろいたように、由美子を見た。

「男のひとのあそぶ場所で、女があそんではいけない、という理由はないでしょう」

と、由美子は言った。

「きょうのあなたすこしへんだわ。なにかあったの？」

典子が、真剣な目いろになった。

「そんなふうに、見えて？」

由美子は、小首をかしげ、あまえるように、典子を見た。

「なんとなく、おかしいわ。だいたい、私たちの絵を見にくるなんてのが、おかしいわ。あなたらしくもない。

もつとも、これは、いい傾向だとおもうな。家庭第一の奥さまもいいけど、自分の生きかたというものを、どこかで、ちゃんと確保しておかないと、だめだとおもうな」

典子は、男のような口のききかたをした。

「毛利が、きょう出張で、大阪へ出かけたのよ。毛利が、うちをあげることは、べつにめずらしくはないんだけど、どういうわけか、うちのなかで、じっとしてい

れないような氣持になったの」

「欲求不満だな、それは」

「そうかもしれない。でも、その正体が、自分でもはっきり、つかめないのよ。なんとなく、もやもやしたものが、霧のように、このへんを、こう、うずまいているの」

由美子は、自分のゆたかなもりあがりをみせている胸のあたりに手をあてた。

「人妻って、だれでも、そんなふうになるものらしいわ。私、結婚しなくて、よかった」

典子は、いたずらっぽく笑った。

「私、このごろ、自分には、もっと、べつの生きかたがあったんじゃないかしら、とおもうことがあるの」

「毛利さんと、結婚したこと、まちが이었다って言うの？」

「ううん、そうじゃあないの。あれは、あれで、私にとって、ぎりぎりいっばいのところだった。べつに、毛利といっしょになったことを後悔しているわけじゃないわ。でも、もっと自分を、おもいきり投げだして、自由奔放に生きてみてもよかったんじゃないかしらって氣がするの——」

由美子は、ためいきをついた。しゃべっているうちに、ことばが彼女を、あおりたててくるようであった。

このまま、しゃべりつづけていると、どんなことばが、自分の口からとびだしてくるか、わからなかった。それが、こわかった。

「じゃあ、このへんで失礼するわ」

由美子は、立ち上がった。

典子とわかれて、夕ぐれのまちを、あるいた。からだは熱っぽく、不安定にゆれているようであった。風景が、いままでに、一度も見たことのないような鮮烈な印象で、彼女のまわりを、とりかこんでいた。京橋から銀座四丁目まで、由美子は、まるでものにつかれたひとのように、あるきつづけた。

空腹を感じて中華料理店にはいった。二階の窓べりに腰をおろした。給仕の少女が、お茶とおしぼりをはこんできた。由美子は湯のみ茶わんを持ったまま、なにげなく、窓ガラス越しに、下をのぞいた。そして、おどろきのあまり、おもわず、茶わんをとりおとしてしまった。

なにか、小さく、さけんだようであった。店中の視線が、自分にむかって、集中するのを感じた。

給仕の少女が、とんできて、おしぼりで、お茶のため

にぬれた由美子のスカートを、ぬぐおうとした。

「ごめんなさいね」

由美子は、少女に小さくいった。

茶わんは、みごとにくだけていた。

「私、急用をおもいだしたの。また、あとで来ます」

由美子は、そういうと、テーブルのうえに百円玉を一個のせて、そのまま階段をはしりおりた。

全身が、はてっている。表へ出た。彼女が、中華料理店の二階の窓から、下の通りを見おろしたとき、ふたりづれの男女を見た。

おどろいたことに、その男のほうは夫の毛利直保であつた。すくなくとも、直感で、そう感じた。

ふいの衝撃が、彼女から注意力をうばい、湯のみ茶わんは彼女の指さきをうらぎって、床に落ちたのであつた。このおもしろい、小さな事故のために、由美子は、もういちど窓の下をのぞいて、それがまちがいないく、夫の直保であるか、どうかを、たしかめる余裕を失ってしまった。

彼女が、中華料理店の外へ出たとき、すでにアベックのすがたは消えていた。由美子は、しばらく放心したように、道のまんなかに突っ立っていた。

そんな姿勢で、自分が銀座の夜景のなかに立つことなど、考えてもみなかった。彼女は、ゆっくり、あるきはじめた。彼女は、いま、自分がひとつのドラマのなかを、あるいているのを、感じるこができた。

夫が、この時間に、こんなところを、しかも女性とあるいているはずがない。つれの女性は、背の高い、わかいい娘であつた。

由美子が、窓の下をのぞいたとき、ちょうど、ふたりは向うからあるいてくるところだったのだ。それで由美子は、ななめ上から、男の顔を見おろすことになった。

そういう角度から、夫の顔を見たことは、いままでにいちどもなかったようである。だから、ひとまちがいであるかもしれない。

だが、あのとき、自分をとらえたおどろきは、ほんものだった、とおもう。すくなくとも、あの瞬間には、彼女は、うたがいのもなくその男が、自分の夫であることを信じこんでしまっていた。

八年間もつれそつた夫を、見まちがえるほど、夫婦の感覚というものは、あいまいなものなのだろうか。

——それにしても、あのふたりづれは、どこへ行ったのだろうか。

さがしだして、たしかめてみなければならぬ、と由美子はおもった。

そうおもったとき、ふいに、夕ぐれが濃度をまして、由美子の周囲にうずまきはじめたようであった。その夕ぐれは、いままで彼女が会ったことのある、どの夕ぐれよりも、悲劇的な色合いを、多くふくんでいるように、彼女にはおもわれた。

彼女は、人波をかきわけるようにして、つきすすんだ。車の往き来も、はげしい。人間も多すぎる。

そんな銀座の夕ぐれのなかで、いったん見うしなうてしまった人間のすがたを、さがし出すということは、ひどく困難のようであった。

彼女は、ふと、あのふたりは、もしかしたら、いま、私がさがしているのと逆の方向に行ったかもしれない、といううたがいをおぼえた。

それで、彼女は、くるりと向きをかえると、こんどはいま来た道を引き返しはじめた。けれども、どこにも、さっきのふたりづれのすがたを、見いだすことは、できなかった。

由美子が、中華料理店の二階から、あのふたりを見つけ、おもてにとびだすまでには、それほど時間は、かか

っていないはずである。湯のみ茶碗をおとしてしまったために、多少、手間どったということはあるにしても、このきわめてみじかい時間のうちに、ふたりがどこかにまぎれこんでしまうというのは、ふしぎのような気がした。

もしかしたら、私は、なにも見なかったのではないだろうか、私が、あの中華料理店の二階の窓から、女づれであるいてくる夫を見かけたとおもったのは、なにかの錯覚だったのではあるまいか、一種の幻覚のようなものに、瞬間的に見まわられたのではないだろうか――。

由美子は、そんなふうにも、考えてみた。けれども、幻覚にしては、あのふたりの印象は、いきいきとしすぎているようであった。

幻覚や錯覚にしては、強烈すぎたとおもう。

由美子は、いくつもの横丁をまがったり、店のなかをほとんど軒なみにのぞいたりした。

けれども、どこにも、さっきのふたりづれのすがたは見られなかった。彼女は、いつのまにか、Mデパートのショウ・ウインドウの前に立っている自分に気がついた。ひどく空虚な気持だった。

ウインドウのガラスにうつっている自分の顔も、ひど

く疲れているようである。もう夫(?)のすがたをさがすことは、あきらめたほうがよさそうであった。

彼女は、ほとんど無意識のように、そのデパートのなかへ、はいって行った。べつにほしいものがあるわけはなかった。

エスカレーターに乗った。それは、ゆっくり、彼女のからだを上へはこんで行った。

エスカレーターは、彼女の重い疲れたからだを、二階のフロアにまでおしあげてくれた。エスカレーターから、フロアにうつるとき彼女は、ちよつとよろめいた。べつにつまずいたわけでも、なんでもないのだが、なんとなく、からだの安定をうしなってしまったのである。彼女は、からだをたてなおし、あたまをおこした。そして、おもわず、

「あっ」

と、ひくくさげんだ。

二十メートルほど前を、あるいているふたりづれが、さっき、中華料理店の二階から見かけた、あのふたりづれであることを、みとめたからである。

しかも、男性のほうは、まぎれもなく、夫の毛利直保であった。やっぱり、夫だった、とおもったとき、由美

子は、おそろしいものを見たような気がした。

それを見たことによって、自分が不幸になるという気がした。あれほど、さがしまわったとき、どこにも見いだすことができなくて、すでに、さがしだすことをあきらめてしまいたいま、ふいに、目の前にあらわれた、というのも、皮肉であった。

そして、彼女は、あれほど、ふたりをさがしだそうとしていたにもかかわらず、ちかちかと、ふたりを見たとき、かえって見たことを、くやむ気持になっていた。

夫が、自分の知らない、若い美しい女性とつれだって、デパートのなかをあるいているということは、ひどく信じがたいことのようにおもわれた。

彼女は、自分の呼吸が、しだいにみだれてくるのを感じていた。

おちつくのよ、おちつかなくては、だめだわ——、彼女は、そう自分に言いきかせた。それから、夫とわかい女のあとを、つけて行った。

ふたりのからだは、びったりとよりそいあっていた。それは、ちよつど、恋人同士か、あるいはわかい夫婦の姿勢を、おもわせるものを持っていた。

由美子は、ふしぎに嫉妬を感じなかった。由美子をと

らえたものは、おどろきでしかないようであった。

たとえば、自動車にはねとばされた人間が、はじめのうち、ショックのために、呆然としているだけで、それからしばらく時間がたってから、痛みをおぼえるのに似ているようであった。

直保と女は、男性の肌着売り場のほうへあるいて行った。直保は、下着をとりあげて、女店員になにか言っている。由美子は、子供のバジヤマ売り場のところから、そんな夫を、ぬすみ見ていた。女の横顔が見える。ほりのふかい、ととのった顔たちである。

そのとき、由美子は、とつぜんうしろから肩をたたかれた。

由美子は、はじかれたように、ふりむいた。その彼女の眼の前に、青年の大きな胸があった。

それは、由美子にかかるいめまいを、もたらしした。その青年の厚いがかしりした胸から、男の匂いともいうふうなもののがわきたち、由美子をはげしくとらえたようである。

由美子は、めまいに耐えながら、その青年の顔を見た。その顔は、由美子にとって、全く未知のものであった。

由美子と同年配の二十七、八かと、おもわれた。日やけしていて、眉毛が濃く、そのしたの眼に、つよいひかりがやどっている。

由美子の肩を、たたいたのは、あきらかにこの青年であった。由美子は、見知らぬこの青年が、なんのために私の肩を、たたいたりしたのだろうか、とおもった。

青年の表情は、緊張にこわばっているようであった。

由美子は、おや、とおもった。青年のうしろに、よりそうようにして、若い娘がたたずんでいたからである。娘はベージュ色のセーターに、細身のストラックスというかっこうである。

娘は、青年の大きなからだのかげに、自分の存在をかくそうとでもしているみたいであった。そんな娘の姿勢は、かなりぎごちない線を、えがきだしていた。

青年は、つばを、ごくりとのみ込んでから、「失礼ですが、これは、あなたのものでしょう」と、なにやら黒っぽいものをさしだした。

それは、うたがいもなく、由美子のさつ入れであった。瞬間、由美子は、顔をあからめた。

「すみません、うっかりしてまして——」

由美子は、手をのばして、青年から、さつ入れをうけ